

檄文

序文

2018年11月11日、第一次世界大戦が終戦を迎えて、ちょうど百年の年に、和多志の妻、与國真澄は一般社団法人『武士道』を立ち上げ、祝賀会を行ないました。その祝賀会において、わたくし与國秀行は、『切腹の儀』を執り行わして頂きました。『切腹の儀』とは、切腹を模倣した儀式のことです。

そして「辞世の句」として、和多志は次の詩を読ませて頂きました。

命捨て 至誠求めて 道行かば 桃李の如く 道は開かん

其の一

「命を捨て 至誠を求めて 道行かば」、これはどういった意味か、それは儒教・孟子の次の言葉「至誠にして動かざる者、未だ之れ有らざるなり」という言葉から説明できます。この言葉は吉田松陰が好んで使った言葉の一つでもあります。つまり「誠でもって動かせないものなど、この世に何一つ無く、もしも動かないのならば、自らの誠が足りないのだ」という意味です。

かつての侍たちは皆、腰に真剣を持って生きていましたが、しかし「喧嘩両成敗」であり、皆が刀の達人であるために、刀の柄に手を掛けることさえ危険で、まさに真剣に生きていました。しかし「江戸太平の世」ですから、たとえば映画や舞台でお馴染みの『忠臣蔵』、吉良邸に討ち入りを果たし、切腹して果てた四十七士であっても、実はそれまでの人生の中で、人を切った経験があったのは堀部安兵衛、ただ一人だったのです。

そんな「江戸太平の世」において、黒舟がやってきた時、吉田松陰はいち早く、ふがない江戸幕府に見切りをつけて倒幕を訴えました。そして吉田松陰は、老中の間部詮勝の暗殺計画を企てました。しかし松下村塾の門下生たちは、後に最も過激な志士となる高杉晋作を含めて皆が皆、師のその過激な計画に反対しました。すると吉田松陰は、「私は天下国家に命を懸けている。しかし君たちは己の保身を図り、立身出世を考えている」といった過激な内容の手紙を送って、弟子たちと絶縁してしまうのです。

しかしその後、「至誠にして動かざる者、未だ之れ有らざるなり」の精神のもと、吉田松陰は「弟子さえも動いてくれないのは弟子が悪いのではなく、まだまだ私自身の誠が足りないのだ」と、反省されて、弟子たちと復縁いたしました。

そして吉田松陰は、黒舟密航の容疑で取り調べを受けた際、あえて命を捨てて、誠を貫かれて、わざわざ聞かれない「老中暗殺計画」を自白したのです。これはまさに「自殺行為」そのものでした。なぜなら江戸時代において、大臣にも相当する老中の暗殺計画を自ら述べることは、死罪に値することであり、そんなことなど、あの当時の常識からすれば至極、当然のことであったからです。そして吉田松陰は、「侍として誇りある切腹」ではなく、「斬首の刑」に処されたのです。しかしその吉田松陰の「死に様」は、一糸乱れぬ堂々とした姿であったそうです。首を刎ねた山浅右衛門によれば、刑場に現れた吉田松陰は実に悠々としていて、役人に『御苦勞様』と挨拶をして端座（行儀正しく正座すること）され、その堂々とした態度に役人も感嘆し、浅右衛門は「首を打たれる瞬間まで落ち着いていた、吉田松陰の姿は真にあっばれであった」と証言しています。

「老中間部詮勝暗殺計画」を止めた吉田松陰の弟子たちでしたが、しかし師の命を捨てた誠、まさに「至誠」によって、松下村塾の門下生ならびに長州藩は、倒幕運動へと突入していきました。すなわち吉田松陰が、あえて自ら「老中間部詮勝暗殺計画」を自白したその理由は、弟子たちに死を賭して、「侍とは如何なるものか」、「誠とは如何なるものか」、「もはや江戸太平の世は終わりを向かえ、今という激動の時代をどう生きるべきであるか」ということを、教えていたわけです。

「もし木を切るのに八時間与えられたら、私は斧を研ぐのに六時間使うだろう」、そう述べたのはリンカーン大統領ですが、己を磨かずして何も大事はなせません。つまり私の辞世の句「命を捨て 至誠を求めて 道行かば」とは、「吉田松陰のように至誠を求めて、精進の道、武士道を歩んでいけば」という意味です。

其の二

そして後半の辞世の句の「桃李の如く 道は開かん」とは、中国の『史記』という書物の「桃李もの言わざれど、下自ら蹊を成す」という言葉に由来しています。「桃や李の木は何も語らないが、しかし実が美味しいために、人が

自然と好んで集まり、その結果、木の下には自然に道ができていく。これと同様に、徳高き誠の人のもとにも、同じく自然と人が慕い集まっていく」という意味です。

世の中には、群れることを恥じ、「一匹狼がカッコ良い」とする論調がありますが、一匹狼では何もことをなせず、私たち人間という生き物は、仲間がいて、群れてこそ大事を成し遂げられるものです。独り、手斧を持って山に臨めば、木を切り倒すことができても、せいぜい1本、2本が限界かもしれません。しかし皆が一致団結して、山に臨めば、山そのものを変えることができます。「虎」という漢字一字が、「なかま」や「むら」といった読み方や意味があるように、時代を変えるにあたって大切なことは「団結」なわけです。

すなわち命を捨てて至誠を目指して精進の道、武士道を歩んでいけば、動かないものは存在せず、そして桃や李の木が何も言わずとも、下には自然に道が出来あがっていくように、自然に人が集まって団結することができて、やがて時代を変えていく、自らを造りつつ未来への道を切り開くのが武士道であるから、この道を友と共に歩いていく、それが私の辞世の句「命捨て 至誠求めて 道行かば 桃李の如く 道は開かん」という意味です。

其の三

では、何ゆえに今、武士道が必要なのでしょうか。

実は日本もアメリカも、政府は通貨を発行する権利を持たず、そのために『日銀』や『FRB』といった民間の中央銀行、すなわち普通の会社が「お金」を発行しております。そして私たち日本国民、あるいは米国民は、その「お金」のために、日本国民、あるいは米国民は働いたり、使ったりして生活しています。単純に言って、日本もアメリカも、国際銀行家の「金融植民地」であるのです。

この「金融植民地」から日本を解放するために、何が何でも武士道が必要不可欠なのです。なぜならこの解放運動は、けっして生易しいものではないからです。

たとえばアメリカ第40代大統領のロナルド・レーガンは、なぜアメリカ政府には、「通貨発行権」が無く、『FRB』に「通貨発行権」があるのか、前々から気になっていました。『FRB』が存在している意味と理由が、大統領には分からなかったわけです。政治経済の本質を分からない人が、政治家になったり、政治家を目指すことほど、国民にとっての不幸はありません。

そこでレーガン大統領は、当時の『FRB』議長のホール・ホルカーというユダヤ人を自称している人物に面会を求めました。しかしまんまと断られました。「大統領が面会を求めても断られる」、この事実を見ても分かるように、大統領は国際銀行家が描く絵の中の単なる俳優にしか過ぎません。皮肉にもレーガンは元役者でした。

しかし最終的にはホルカーが折れて、昼食を取りながら面会をしたそうです。そしてレーガンは、開口一番、「FRBはなぜ必要なのか？」という質問を、私はよく受けるんだが」と述べたそうです。するとその質問に、ホルカー議長は慌てたそうです。そしてその後、「レーガン大統領銃撃暗殺未遂事件」が起きます。

ホルカーの次に『FRB』議長になったグリーンズパンは、そのやりとりを見ておりました。そして彼は自身の著書の中で、「政治家は『FRB』に触れるべきではない」といった内容のことを述べています。

第7代大統領アンドリュー・ジャクソン、第16代大統領エイブラハム・リンカーン、第20代大統領のジェームズ・ガーフィールド、第29代大統領ウォーレン・ハーディング、第35代大統領のジョン・F・ケネディ、そして第40代大統領ロナルド・レーガン、彼ら6人の歴代アメリカ大統領に共通していること、その一つは「任期中に暗殺未遂、もしくは暗殺されたこと」であり、そしてもう一つは「通貨発行権に触れたこと」です。

通貨発行権を持つ中央銀行『FRB』はアンタッチャブルな存在であり、これに触れると暗殺に遭う、それが大半のアメリカ国民さえ未だに知らないアメリカの真実の姿なのです。

しかしトランプ大統領登場以降、その流れが今、大きく変わろうとしています。

そして「通貨発行権を持つ中央銀行はアンタッチャブルな存在である」、それは日本においても、どうやら同じなようです。江戸時代から明治にかけて興った神道系宗教『大本』、この宗教は一般的には『大本教』と呼ばれておりますが、その開祖は「出口なお」という方で、その娘婿に聖師：出口王仁三郎という方がいます。この出口王仁三郎の曾孫で、一般社団法人『出口王仁三郎大学』の学長を務められている方に、出口恒という方がいます。この出口恒という方に、私が直接、伺った話によりますと、『大本教』の聖師：出口王仁三郎は、政治を深く学ばれて、そして「政府紙幣」を公言し始めたそうです。すると「大本事件」が起きたそうです。

「大本事件」とは、『大本』の宗教活動に対して、日本の内務省が「天皇陛下に対して不敬である」という理由から行った大弾圧事件のことです。1921年(大正十年)に「第一次大本事件」が起こり、1935年(昭和十年)には「第二次大本事件」が起こりました。

当時の政府は、わざわざ『大本事件の真相』というテキストまで作り、「出口王仁三郎が皇室を廃して、自分が天陛下に成り替わろうとしている」という筋書きを作り、『大本』の信者たちに自白を強要しました。しかし大本の信者たちが、これを頑強に否認すると、激しい拷問が行なわれたのです。逆さ吊りされたり、鼻や口に水を注がれたり、頭髪を驚ぶかみして引きずり回されたり、革靴で一時間も踏みつけられたり、焼けた火箸を体に当てられたりなど、ありとあらゆる凄惨な拷問が行われました。

この拷問によって、61人の被告のうち16人も大本信者が判決までに死亡し、生き残った人の中には、精神に異常をきたした人もいます。しかも当時の日本政府は、裁判の判決を待つことなく、「不敬の真相」がまだはっきりと確定していない中で、「大本の全施設に対して破壊を行ない、『大本教』を地上から抹殺する」と公言したのです。そして実際に、当時の日本の政府によって、『大本』の神殿などの施設がダイナマイトによって爆破され、本部の石像は首を切り落とされ、神殿を建築するために用意されていた木材まで、二度と神殿を再建できないように、わざわざ短く切断するという徹底した破壊が行われたのです。

はっきり言って、「大本事件の真相」は謎のままです。しかしすでに述べましたように、出口王仁三郎氏のひ孫である出口恒氏が、「大本事件の原因は、聖師出口王仁三郎氏が政府紙幣の発行を公言したから」と述べているわけです。もしもこれが真実ならば、日本は先の敗戦の前に、1882年10月10日に『日銀』が設立された時より、すでに政治的な意味においても、何かしらの侵略を受けていたことになります。

「大本事件」については、真相は謎のままですが、ただアメリカの歴代大統領が暗殺、あるいは暗殺未遂に遭ってきたように、やはり「中央銀行」はアンタッチャブルな存在です。ローマで「酩酊会見」を行ったとして、日本中からバッシングを浴びた中川昭一氏は、その半年後に亡くなりましたが、彼の横にいたのも白川日銀総裁だったことは記憶に新しいはずです。

其の四

私の妻、与國真澄は数名の同志と共に、一般社団法人『武士道』を設立しました。そして私たちは「トランプ革命」の流れを日本にも引くためにも、『大本』と同様に「政府紙幣」を公言しております。そうしたこともあってか、2018年11月11日に『明治記念館』にて行われた設立祝賀会では、出口恒氏も素晴らしい祝電を下さいました。

1935年の「第二次大本事件」では、『大本教』の第二代教主、出口澄は逮捕されて、七年にもおよぶ拘留生活を過ごされました。一般社団法人『武士道』は、『大本』とは異なり宗教法人ではなく、あくまでも一般社団法人であって宗教団体ではありませんが、しかし『大本』と一つだけ共通しているところがあります。それは「一般社団法人『武士道』も、政府紙幣について述べると共に、理事長である与國真澄も逮捕、拘留を覚悟している」ということです。

そしてわたくし与國秀行は、すでに『切腹の儀』を執り行い、死人と化しております。

なぜなら日本を金融植民地から解放するためには、それなりの覚悟が必要不可欠だからです。

其の五

日本の金融植民地解放のために、武士道の再建は急務でありますから、ここで「日本の心・大和心」を探求してみたく思います。そして「日本の心、大和心」を追求すれば、かならずや日本の神道の主権神と言われている天照大神に遡ることができるでしょう。

その弟の須佐之男命は、乱暴であったために、神々の住む高天原という天界を追放されて、出雲の国（島根県）にて、八つの頭と八本の尾を持った巨大な怪物、八岐大蛇^{ヤマタノオロチ}を退治して、尾から出てきた剣を天照大神に献上します。

また、天照大神は孫の瓊瓊杵尊^{ニギハヤヒノミコト}を、葦原中国^{あしはらのなかつくに}へと送りました。葦原中国とは、日本神話において高天原と黄泉の国の間に在るとされる世界であり、この高天原より瓊瓊杵尊が地に降り立つ出来事を「天孫降臨」と云います。

この際、天照大神は、降臨するニニギに稲穂を渡して、「この稲を育てて葦原中国を治めなさい」と言いました。そのためにその降り立った地は、「稲を高く積む場所」として「高千穂」と名付けられました。

このニニギの曾孫が「カムヤマトイワレビコ」であり、宮崎県の日向を発ち、大和を征服して紀元前660年2月11日に橿原宮^{かしはらのみや}で即位して、初代神武天皇となります。この橿原宮があったとされる奈良県橿原市に、「橿原神宮」が建立されています。ですからGHQに占領、改造されるまで、日本では2月11日を『紀元節』と呼んできました。ですから「建国記念日」は本来、「紀元節」であり、約二千七百年前に日本が建国された日を意味しているのです。

そして第十二代景行天皇の皇子で、第十四代仲哀天皇の父に日本武尊という方がいます。日本武尊は東へと国造りの戦へと出かけていきます。

「太古」とは、「遙か悠久の昔」を意味していますが、失われつつある日本に「上古」という言葉があります。これは「古い昔」という意味の古語です。そして「土蜘蛛」という言葉があります。「土蜘蛛」とは、上古の日本において、朝廷・天皇に恭順しなかった土豪たちを示す名称です。すなわち太古から上古の時代における武士道とは、土蜘蛛と戦い、服従させ、中央集権型の日本を築き上げてきました。

其の六

そして少し古い時代を「中古」と言います。飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町、安土桃山時代、江戸時代などが、この「中古」に当たるでしょうか。「持攻攻撃」と言えば、先の大戦を思い浮かべる人が多いでしょうが、鎌倉時代滅亡期の「湊川の戦い」に、「持攻攻撃の源流」があります。京都に迫る足利尊氏の約10万人の大軍に対し、京都を死守しようとする楠木正成の軍勢は、僅か700人ほどでした。それでも楠木正成公は、百倍以上の敵に対して十六回もの突撃を行ない、一時は足利軍を押し返し、足利尊氏公の本陣にまで迫ったのです。しかしその戦力差は「百対一」でありますから、最後は致命傷を受け、弟の楠木正季と互いに刺し合って果てました。

その後、日本は激しい戦国時代を迎えながらも、武士道が受け継がれていきます。楠木正成公と同時代に生きた足利尊氏も、彼らの前にいらっしやった平清盛も、源頼朝、義経も、戦国時代の武田信玄も、上杉謙信も、そして織田信長、豊臣秀吉、徳川家康も皆、侍でした。

そして江戸太平の世になると、まさに「大江戸百花繚乱」、中国春秋時代に多くの学者、学派が現れて「諸子百家の時代」と呼ばれたように、この江戸時代の日本にも、多くの思想家、学者が現れて、武士道の思想と教育が確立していきました。佐賀藩士・山本常朝が口述し、その言葉を田代陣基が筆記した書物に『葉隠』という書物があります。この『葉隠』の一文、「武士とは死ぬことと見つけたり」はあまりにも有名です。あるいはテレビドラマ『水戸黄門』でお馴染みの水戸光圀公は徳川家康の孫に当たりますが、彼は儒学を奨励して、『大日本史』という歴史書を編纂されました。また幕末になります、武士道の教育者の一人に、先ほど紹介した吉田松陰などがいるわけです。

中古の武士道を考えてみますと、「土蜘蛛がいなくなり、天照大神から続く皇室に権威を抱く日本という国において、戦国時代を経て天下統一すると共に、学者、教育者が武士道思想を確立していくことで、武士道精神がより日本国中に広まっていった」と、そう表現することができるでしょう。

其の七

そして明治以降、武士道教育は一部の侍のみならず、広く義務教育で行われ、特に軍人たちの間で武士道思想が積極的に説かれました。この頃、楠木正成公は「大楠公」と称され、十六回にも及んだ「突撃精神」は「大楠公精神」と呼ばれて褒めたたえられました。こうして先の大戦になると、多くの侍、特に若者たちが日本を死守するために、「散るぞ悲しき」の想いのもと楠木正成公の如く散華していったわけです。

しかし約七十年前の先の敗戦です。すでに日本は、明治維新の頃、1882年に民間中央銀行『日銀』を創設されて、「金融侵略」を受けてはいたのですが、しかしこの敗戦を機に、日本はますます「金融侵略」を受けていきます。しかもこれと共に、その「金融侵略の実像」を分からなくさせてしまうことを目的に、国際銀行家はGHQを通して、「武士道教育の破壊」を行ったわけです。こうして日本人の武士道精神が破壊されていきました。

その結果、いつしか日本人は、政治や経済に無関心になり、無知になってしまうことで、自分たちが金融奴隷状態に置かれるばかりか、これから飲み水に毒を入れられることにも気づいていないのです。

この国は一度、「常識」を破壊して、常識を白紙に戻して、ゼロから「常識」を創造し直す必要があります。

「金融植民地解放」による「常識破壊」のために、武士道の復活が急務であり、だから一般社団法人『武士道』を、私たちは設立したわけです。

さあ、私たちの番です。

妻と生き 友と語り いたのき日 しかして我は 公に死す